



大隅町誌

(改訂版)

大隅町誌

(改訂版)



弥五郎どん



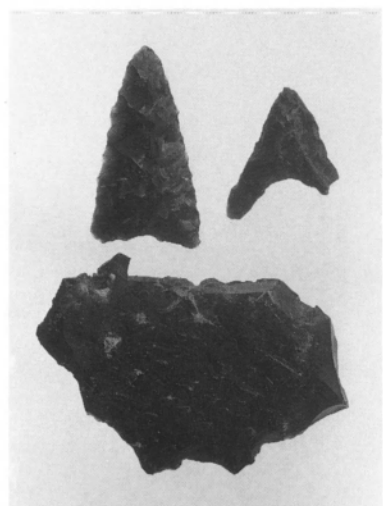
円筒土器(早期)
(月野馬ノ瀬平出土)



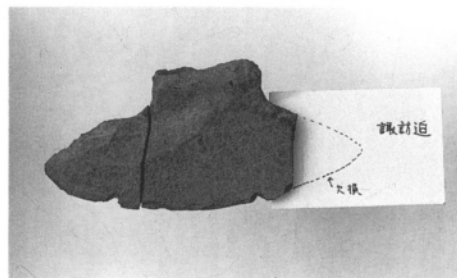
縄文土器(早期)
(岩川水喰谷出土)



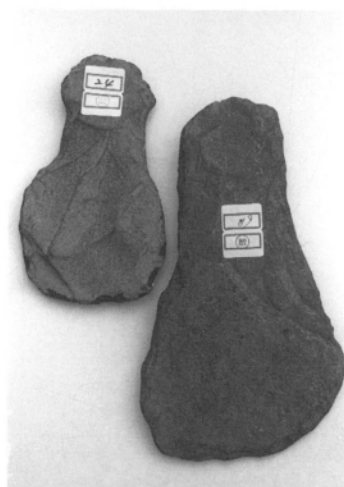
縄文土器(中期)
(坂元本元寺出土)



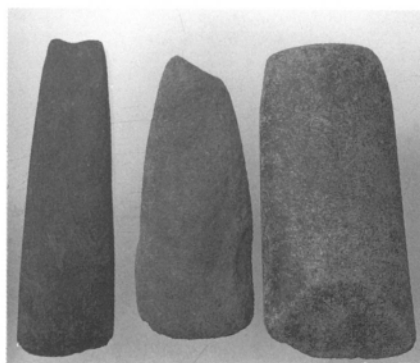
黒曜石の鎌(八合原)
及び原石(本元寺)



石包丁
(岩川諏訪道出土)



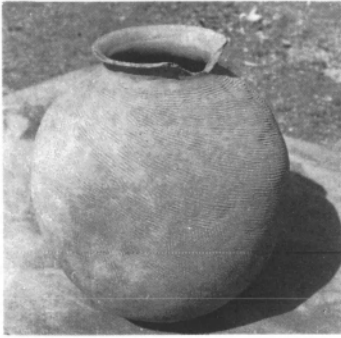
打製石斧
((小)久木山出土、(大)神掛出土)



磨製石斧
(左二点荒谷・右菅牟田出土)



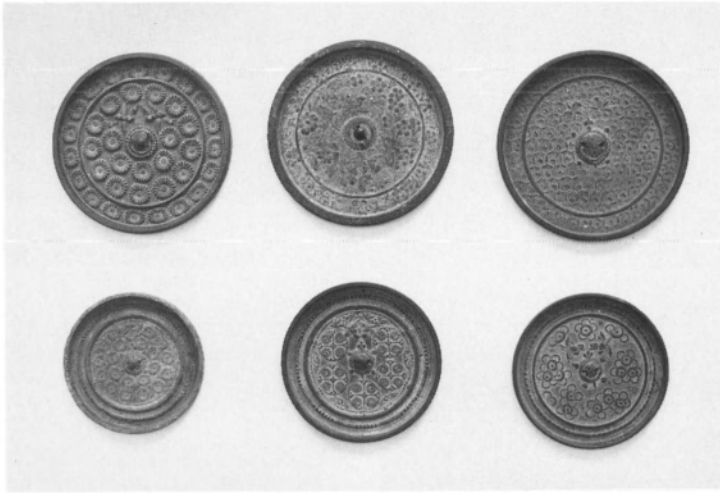
石皿(荒谷出土)
と磨石(八合原出土)



弥生式壺
(坂元片重出土)



須恵器骨壺
(宮ヶ原出土)



古鏡六面(太田神社蔵)



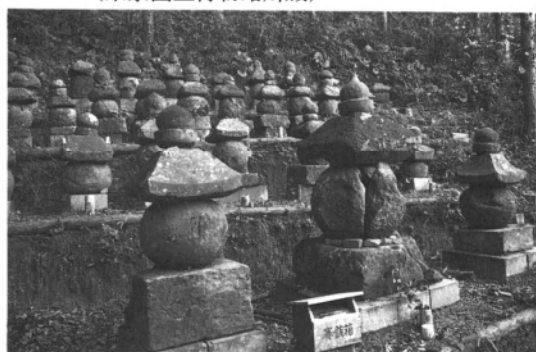
古鏡二面(飯田松下静氏蔵)



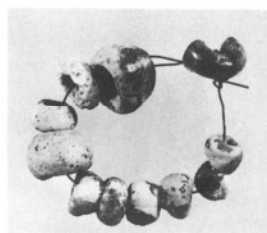
月野経塚伴出鉾形金具
(東京国立博物館所蔵)



経筒(月野下岡出土)
(東京国立博物館所蔵)



柳井谷石塔群(伝説景清の墓)



月野経塚伴出青硝子玉
(東京国立博物館所蔵)



恒吉城(日輪城)



岩川領主 伊勢健彦



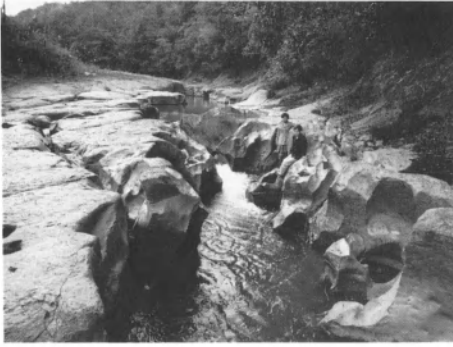
伊勢家祖先の墓



私領五番隊小隊長
大津十七



官軍墓地



大鳥峽



岩屋観音



吉田一円の磨崖仏



笠木原開田記念碑



恒吉太鼓橋



土地改良記念碑
(ボラ排除)



月野天神堰記念碑



入角田之神



新田場水車



薬師田田之神



春田田之神



桂田之神



内山田之神

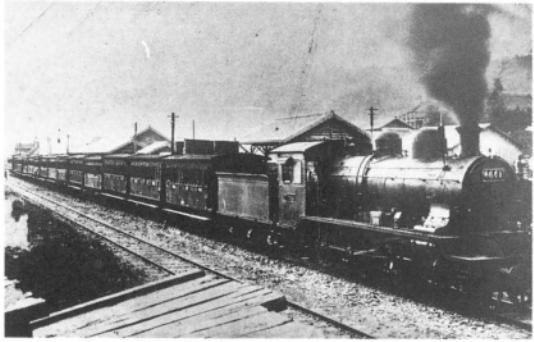


須田木庚申塔

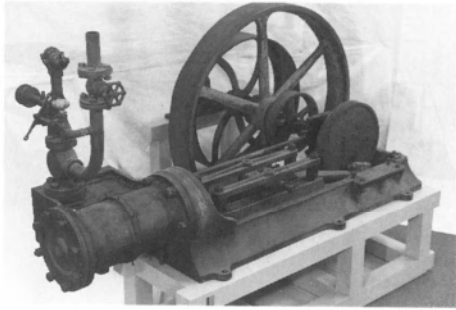
(宝永七年 阿弥陀三尊の梵字がみえる)



川路山六地藏



汽 車(岩川駅において)



磯集成館製造の蒸気機関



岩 川 の 町



岩 川 の 町



文化会館



中央公民館



郷土館



大隅町役場



大隅運動公園

岩川(村)町長



町長職務代理者 有村武治



4代 川崎 和夫



初代 中村源五右衛門



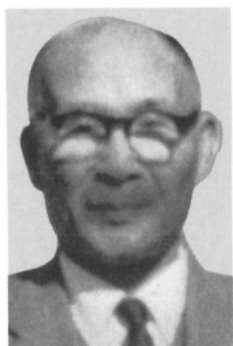
7代 吉瀬 寛



5代 川崎 武二



2代 牧之瀬 良信



8代 黒木 良行



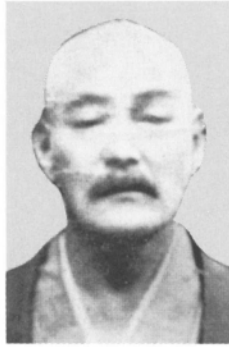
6代 大津 廿



3代 河野 賢蔵



12代 中島 精一

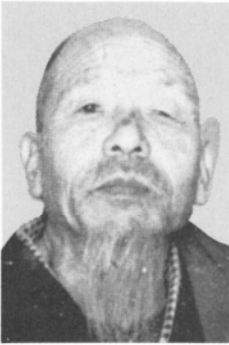


8代 川畑 篤行

初代 小田 勲
 2代 川畑 篤徳
 3代 長池 長慶
 4代 小田 長武
 5代 川畑 篤徳

恒吉
 村長

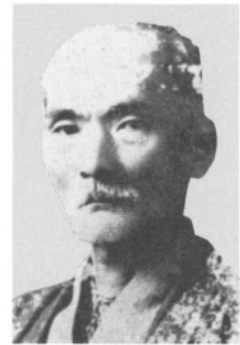
(以上写真なし)



13代 後藤 重森



9代 小田 景敬



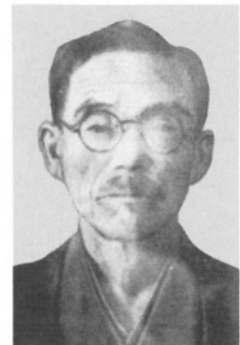
6代10代 宗像 政包



職務管掌 浜崎喜之助



11代 松下 景広



7代 小田 長良



20代 伊集院 忠 雄



17代 本 鍋 市 二



14代 藁 田 伊 之 助



18代 大 村 繁



15代 遠 矢 長



19代 奴 久 妻 兼 二



16代 勝 目 琢 磨

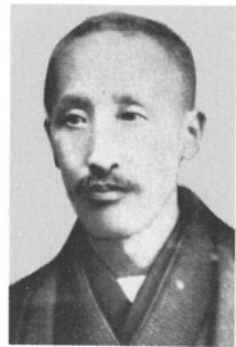
月野村長



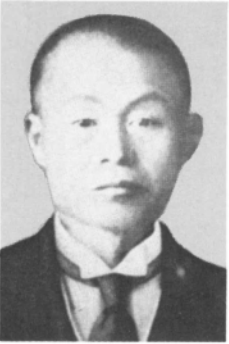
7代 藤屋 一郎



4代 有馬 助五郎



初代 若松 親武



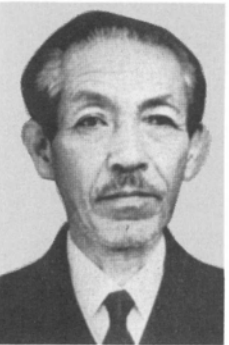
8代 藏岡 金之助



5代 中内 伝左衛門



2代 野村 綱藏



9代 岩永 藤三



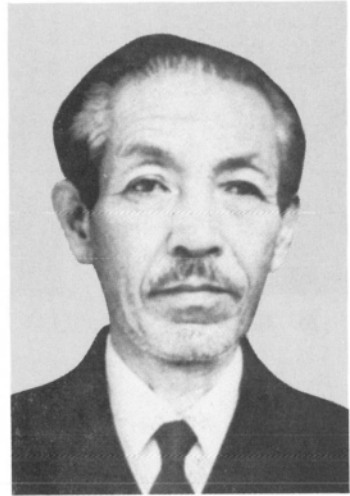
6代 義川 祐吉



3代 藏岡 武吉



2代 川崎 克巳

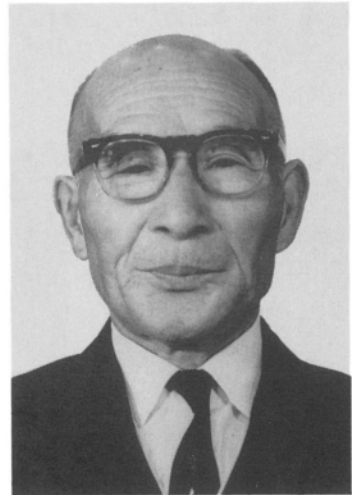


町長職務代理者 岩永藤三

大隅町長



3代 盛田 政義



初代 黒木 良行



6代 永野 静夫



4代 桑元 善次

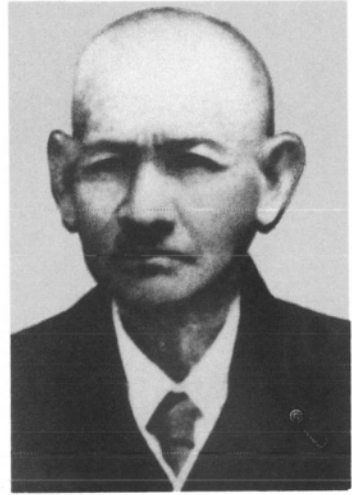


5代 坂口 信雄

大隅町議会議長



3代 川崎 克巳



初代議長 遠矢 長



4代 大村 繁



2代 井手之上若右衛門



8代 永田 端 義



5代 中 礼 祐 吉



9代 前 田 毅



6代 泊 親 治



11代 伊地知 厚 則



9代 鍋 山 重 盛



10代 桑 迫 喜 藤 太



町花 ツツジ



町木 ウメ

大隅町民憲章

美しい自然と古い歴史につちかわれた大隅町を
さらに豊かな明るく住みよいまちにするために
この憲章を定めます

- 一、私たちは限りなく郷土を愛し発展につくします
- 一、私たちは明るく元気で楽しく仕事にはげみます
- 一、私たちはすなおでねばり強い子どもをそだてます
- 一、私たちは環境を整え美しい町をつくります
- 一、私たちはよく学んでりっぴな社会人になります



市街地

大隅町民歌

(1)

虹の園なら 光なら
 明るい われらの大隅町
 住むよろこびに 人の和に
 四季の絵巻も うるわしく
 いのち若やぐたのしさだ

(2)

花の駒なら 和牛なら
 名だたる われらの大隅町
 日々新らしく たくましく
 大地に親しみ 山に生き
 湧くは希望の 歌声だ

(3)

香る夢なら 文化なら
 ゆたかなわれらの 大隅町
 見よ限りなく 躍進の
 けむり渦まく いらかこそ
 行手展ける シンボルだ

序

大隅町は、鹿児島県大隅半島贈嶽郡のほぼ中央に位置し、鹿児島市、都城市、鹿屋市、志布志町、串間市を結ぶ交通の要衝にあたっている。

昭和三十年一月二十日町村合併促進法に基づき、岩川町、恒吉村および月野村が合併して新設され、さらに同年四月一日野方村の一部荒谷地区を編入合併して、一躍総面積一四五・七六平方粍米、人口二四・九七五人の大隅町となった。合併以来すでに十三年、戦後の窮迫した財政の中から今日の平和と繁栄を築き上げられた先輩に感謝の誠を捧げたい。

今年丁度明治百年、我が国は幕末から明治にかけて世界史上類例のない前進と飛躍をとげたが、その中で時代の主役をなしたのが我が鹿児島県人であった。いかえれば日本の独立と今日の繁栄の基礎は、我等の先輩鹿児島県人によって築きあげられたといっても過言ではない。それだけに我等にとつては明治百年の意義は又貴いものがある。ここにおいて私共は、自ら自信と誇りをも

つてこの百年を迎え正しい認識のもとに学ぶべきは学び、反省すべきは反省して更に前進して明治二百年の歴史を築かねばならない。この意味において明治百年記念事業として郷土の歴史をたどり名所旧跡をたずねて郷土史を発刊することになったが、本書は長い年月にわたり多くの先生方によって資料を蒐集され、編纂されたもので本書の価値はまた極めて大であり貴重である。ここに改めて編纂の衝に当られた先生方に深甚の謝意を表するとともに希くは本書が大隅町民の心よりどころになり平和で明るい、豊かな町づくりに寄与することを切望して序とする。

昭和四十三年十月

大隅町長 盛田政義

温故知新—発刊に寄せて—

悠久なる過去から現在へ、そして亦久遠の未来へ、時は連綿として流れる。過去は現在の母胎であり、現在は未来の基盤である。

思うに、すべての事象は、時間的な歴史性と空間的な社会性によって生起し、流転し、発展する。

秀麗なる風土と、俊敏なる民族。不退転の気魄によって築かれた、輝かしい歴史と伝統。豊かな知性と清純な感性によって、創造された固有の文化。ここに卓越せる日本の誇りがあり、麗わしい我が郷土の喜びがある。

心のふるさとであるこの郷土の地誌を、歴史を、文化を、社会を、つぶさに凝視し、観照するとき、ひたすらに先人への思慕と、郷土への愛着の念が油然而として湧き起こってくる。更にまた、現代を担って立ち上り、雄々しく生きるための、うつ勃たる意欲と勇氣とが燃えあがり、これからの新しい世代に伸びていく郷土の躍進と祖国の発展のために、奮起の念を新にする。

故きを温ねて新しきを知る！明治百年の意義ある年

に、待望久しかった大隅町誌の発刊を見る。心からなる喜びと感謝を捧げる次第である。

深澄の気溢れる秋空の下、絢爛たる香氣の漂う菊花の如く、躍進する明治二百年への第一歩を力強く踏み出そう。

昭和四十三年十月下流

—新装成れる中央公民館にて—

大隅町教育委員会

教育長 宇都重義

温故知新

文化は生きてゐる。久遠の過去より無限の未来を目指して、生々發展して止む所がない。現代は其の流れの中の一点に過ぎない。

宇宙時代も偶然に現われたものではない。幾多の科学者達が、長年月の経験と研究を繰り返して、生まれつつあるのである。過去のものは古臭いなどとさげすむのは、文化活動を利那的皮相なものに、墮落せしむるであらう。

明るい理想的大隅町を建設するには、過去の先人達の文化活動と、文化財を良く見極めて、取捨撰択し、内外の合理的新知識を十分に盛り込んで行くべきである。

而し其の資料は明治初期以来の外来思想に押され大東亜戦争、各種の合併により、散逸汚損し、民芸民謡行事等は全く跡を絶っている。そこで町は足掛十年の長年月と、少なからぬ経費を掛けて、郷土誌の編纂をなし、今日漸く出版の運びに至りました。

本誌は古代編を本村先生（岩川高校先生）、近代・現代

編を高木先生（末吉町出身の郷土誌研究家）に執筆を御依頼し、資料の集め方に両先生並びに委員の方々は、町内は勿論郡内県内遠くは県外にまで、足を伸ばし、古文書記録統計実地踏査古老や、旧家の子孫有名人、各種団体等の訪問、地理の視察、撮影、図書館通い等長年月に亘り能う限りを尽して漸く完成するに至りました。

願わくば此の郷土誌が温故知新（古きを尋ねて新しきを知る）理想的大隅町建設の好資料たらんことを切望して止みません。

× × × × ×

故郷の山に向いて

いふことなし

故郷の山は

ありがたきかな

石川啄木

昭和四十三年十一月十五日

大隅町教育委員長

大隅町郷土誌編纂委員長

岩 永 藤 三

大隅町誌改訂版発刊にあたって

大隅町誌が今回再版のはこびとなりましたことは誠に喜ばしいことであります。昭和四十四年に初版を刊行し町民をはじめ多くの人々に御高覧いただきて参ったところであります。しかし、昨今の社会、経済の変せんところに伴う本町の目覚ましい伸展や、更に新しい史実の発見等によって既刊の町誌に補完の必要性が生じるとともに、郷土史に対する関心の高まり等にかんがみ、稿を新にして町政施行三十周年の記念事業として昭和六十年から編さん作業を始めたところであります。

我が郷土大隅町は、この郷土誌をひもとくと縄文時代頃から先住民族が住んでいた事が想像されます。古代から今日までの歴史を辿る時、祖先が歩んできた時間や空間、そして色々な出来事に対して悠久、広大さと人間の営みの靈妙さを感じます。大隅町は昭和三十年町村合併以来町民の融和とたゆまない努力によりまして、明るく住みよい町づくりが力強く継続されて来ました。今後町制施行三十周年を節目にして更に「曾於地域の拠点とし

て、魅力と活力ある健康な町」づくりをめざして、先人の尊い教えと実績を受け継いで一層の発展が期待されるものであります。この町誌を愛読していただき、来るべき二十一世紀に備え私どもが生きるために又大隅町発展の糧として活用していただきたいとおもいます。

後になりましたが、町制施行三十周年の記念事業として再版に強い熱意を注がれた故坂口信雄町長の御遺徳を称えさらに五年余にわたり、資料収集、執筆等に献身的に御尽力いただきました町誌編さん委員各位並びに資料提供等に御協力賜りました皆様に深甚なる敬意と感謝の意を表しまして発刊のことばといたします。

平成二年一月

大隅町長 永野 静 夫

町民の心のよりどころ

そして二十一世紀への

飛躍台として—発刊に寄せて—

昭和四十四年に発刊されました『大隅町郷土誌』に、さらに新しい資料とそれに二十年間の郷土の目覚ましい発展の歩みを増補し、町制三十周年記念事業の一つとして郷土誌を刊行することになりました。

大隅町は山紫水明の豊かな自然に恵まれ、牧場や飼育舎には家畜が群れ、田畑には稲や野菜・お茶が青々と生育しています。

また、わが郷土は交通をはじめ情報網が四通八達して商工業発展の基盤を整え、人々は心を合わせて明るい住みよい町づくりを目ざし、政治・経済・文化の各方面にわたり進展を遂げつつあります。

思うに、郷土の心はわれわれの血の中に、この土地に、そして郷土の山河とともに悠久の過去から現在、未来へ生成発展することは歴史上の理念であります。

そこで、この町誌によって、わが大隅町の地誌・歴史・文化・社会・人物等の足跡を凝視するとき、祖先・先人の偉業に対する思慕の念がおのずから湧出し、現代と明日を担って立つ意欲と勇気が燃え上がるものと思えます。

これは、まさに今放映中のNHK大河ドラマ『翔ぶが如く』の若獅子たちが熱き思いを胸に秘め、時代を駆けぬけたあの情念と行動力・企画力・先見性に通ずるものがあると思います。

私たちは意識すると意識しないにかかわらず、精神的にも物質的にも生活共同体である郷土の歴史や風土によって心身ともに形成されています。したがって郷土の地誌・歴史を通じて「故きを温ねて新しきを知る」ことは自分の生き方を考える上で、さらに住みよい町をつくる上でも大切なことであると信じます。

郷土を知ること、郷土を愛する心を育て、郷土を愛する心は郷土に寄与する原動力になるものと思えます。

幸い、本町誌は、縄文時代から現代に至るさまざまな変遷を丹念に記念し、編さんされた貴重な宝の蔵でありますから、本町関係者並びに多くの方々、が座右の書とされ、心の寄りどころとされると共に、ますます高度技術

化・情報化・国際化・高齢化・そして宇宙時代化するであらう二十一世紀への発展の飛躍台ジャンプ台にしていただきたいと思ひます。

最後に、資料収集・調査研究・執筆等永年にわたり献身的・積極的に御尽力くださいました編さん委員各位、並びに資料提供や御指導・御協力くださいましたたくさんの方々に対し衷心から敬意と感謝を申し上げますと共に、この偉業をみんなで喜びたいと思ひます。

平成二年一月

大隅町教育委員会

教育長 竹 井 勝 志

目次

序	町長	盛田政義
序	教育長	宇都重義
序	教育委員長	岩永藤三
改訂版序	町長	永野静夫
改訂版序	教育長	竹井勝志

序説 大隅町の自然的環境……………一

第一編 古代……………九

第一章 原始社会……………二

第一節 旧石器文化時代……………二

一 人類の進化と旧石器文化……………二

二 日本列島の形成と旧石器人類……………二

三 南九州の旧石器時代の遺跡……………三

第二節 縄文文化時代……………三

一 縄文文化とは……………三

二 自然環境……………三

三 縄文文化……………四

四 鹿児島県の縄文文化……………五

第三節 弥生文化時代……………七

一 特徴……………七

二 弥生文化……………七

三 墳丘墓と周溝墓……………九

四 鹿児島県の弥生文化……………九

五 貨泉の出土……………一〇

第四節 大隅町内の遺跡と遺物……………三

第二章 大和時代……………六

第一節 国家の形成……………六

一 南九州と邪馬台国……………六

二 大和国家の成立と南九州……………六

第二節 隼人の社会・文化……………三

一 隼人の社会……………三

二 古墳文化……………三

第三章 律令国家……………六

第一節 大隅国の設置……………六

一 大隅国分立と日向国……………六

二 大隅・日向国政のあらまし……………四

三 班田制……………四

四 駅路……………四

五 風土記……………四

六 倉院……………四

七	別府	三〇	三	富山氏	三〇
八	園	三〇	四	肝付氏	三〇
第二節	隼人の反乱	三〇	五	晩年の季基	三〇
一	隼人族と大和朝廷	三〇	第五節	月野の経塚	三〇
二	熊襲・隼人とは何か	三〇	第六節	平安末期(平氏全盛時代)	三〇
三	隼人の反乱	三〇	一	僧俊寛	三〇
第三節	弥五郎どん	三〇	二	平安末期までの南九州	三〇
一	弥五郎どんは何者か	三〇	三	平信基	三〇
二	巨人信仰としての弥五郎どん	三〇	第二編	中世	三〇
第四節	奈良朝時代補記	三〇	第一章	鎌倉時代	三〇
一	桜島と霧島の噴火	三〇	第一節	鎌倉時代頃の大隅町	三〇
二	租税の減免(風水害その他)	三〇	第二節	惟宗忠久の島津庄入国	三〇
第四章	平安朝時代	三〇	第三節	領家と地頭	三〇
第一節	荘園の発生	三〇	第四節	島津忠久入国と三州諸族	三〇
第二節	日薩隅の荘園	三〇	第五節	平景清の墓伝説	三〇
第三節	島津荘の成立	三〇	第六節	日向の景清伝説	三〇
一	一円荘(本荘)の開発	三〇	第七節	元寇	三〇
二	寄郡と深河院	三〇	第八節	鎌倉幕府の滅亡と建武中興	三〇
第四節	島津荘政所と荘官	三〇	第九節	景清墓伝説と岩川氏	三〇
一	島津荘政所	三〇	第十節	平姓肥後系岩川氏由緒考	三〇
二	平季基	三〇	一	平姓肥後氏についての考察	三〇

二	平姓肥後系岩川氏について	二〇六	第八節	岩川島津忠朝領となる	二四三
第二章	南北朝時代	二二	第九節	岩川新城の戦と恒吉、槻野	二四四
第一節	野辺氏深川院を領す	二二	一	八幡神社	二四四
第二節	南北朝の争乱	二七	二	恒吉城略史	二四四
一	南北攻防	二七	三	槻野村	二四四
二	島津氏の宮方化と畠山氏の衰亡	三三	四	岩川新城の戦	二四五
三	岩河村の大隅正八幡領化	三五	第十節	長倉上総守兄弟と飢肥合戦	二四六
四	正平の国合原合戦と岩川氏	三六	第十一節	恒吉宮ヶ原の戦(宮ヶ原千人塚)	二四七
五	岩河村氏久領となる	三〇	第十二節	忠親、貴久へ末吉を献ず	二四八
六	今川満範と岩河城	三三	第十三節	島津と伊東の末吉会談	二四九
第三章	室町時代	三四	第十四節	肝付氏の反乱	二五〇
第一節	島津久豊と恒吉	三四	第十五節	貴久、末吉を北郷氏に与う	二五一
第二節	島津忠国末吉に移る	三五	第十六節	岩川、月野の戦	二五一
第三節	足利義昭事件その他	三七	第十七節	飢肥城陥落	二五二
一	桜島の大噴火(文明溶岩)	三七	第十八節	木崎原合戦と川崎氏	二五三
二	恒吉領主山田聖栄	三九	第十九節	末吉国合原役と肝付氏の失脚	二五三
三	靈岩山仙遊寺槻野岩屋観音	三九	第二十節	恒吉北郷領となる	二五三
第四節	伊作久逸の乱(第一、第二飢肥役)	三九	一	投谷八幡の再興	二五三
第五節	岩川新納領となる	四〇	二	蹲踞大明神遷宮	二五三
第六節	三州大乱	四〇	第四章	安土桃山時代	二五四
第七節	槻野の戦	四二	第一節	安土桃山時代	二五四

第二節	島津氏の九州制覇（三州統一後）	一四六	三	伊勢貞昌の上書その他	一八五
第三節	豊臣秀吉の島津征伐	一四七	第十四節	月野氏について	一八五
第四節	朝鮮の役	一四八	第十五節	伝説	一八六
一	文祿の役	一四八	第三編	近世	一八九
二	慶長の役	一五〇	第一章	外城（郷）建設	一九一
第五節	文祿の検地	一五〇	第一節	概説	一九一
第六節	都城領主の更迭	一五一	第二節	末吉外城（郷）	一九四
第七節	小浜文書	一五二	第三節	恒吉外城（郷）	一九六
第八節	庄内の乱	一五三	第四節	志布志外城（郷）	二〇二
第九節	浅井、朝倉伝説	一五三	第二章	私領	二〇五
一	朝倉姓八木氏	一五三	第一節	概説	二〇五
二	平姓八木氏	一五四	第二節	伊勢家	二〇六
三	浅井、朝倉伝説	一五五	第三節	川上家	二〇〇
第十節	中世の畜産	一五七	第四節	桂家	二〇七
一	福山野牧	一五七	第五節	宮之城島津家	二〇四
二	末吉野牧	一五八	第六節	島津仁十郎私領	二〇三
第十一節	関ヶ原の戦	一五九	第三章	兵事	二〇四
第十二節	投谷八幡文書	一六〇	第一節	島原の乱	二〇四
第十三節	伊勢貞昌	一六三	第二節	薩英戦争	二〇四
一	伊勢家の由来	一六三	第三節	長州征伐	二〇五
二	伊勢貞昌の武功	一六四	第四章	麓と野町	二〇六

第一節 岩川	二八
第二節 恒吉	二八
第五章 交通	三〇
第一節 街道	三〇
第二節 一里塚	三三
第三節 宿場	三五
第六章 門割制度	三五
第一節 概説	三五
第二節 伊勢家の蔵	三九
第三節 門割	三九
第七章 畜産	三七
第一節 馬牧	三七
第二節 末吉牧	三七
第三節 馬追	三七
第四節 恒吉の名馬筋	三二
第五節 安永の桜島爆発	三二
第六節 牧の廃止	三四
第七節 笠砥神社御神体の争奪	三五
第八節 その他の牧	三七
第八章 宗教	三九
第一節 宗門手札改帳	三九

第二節 恒吉の寺院	三三
第三節 一向宗禁制	三四
第四節 岩屋観音	三〇六
第九章 物語	三二
第一節 肥後権之丞の殉死	三二
第二節 梶ヶ野乙名	三五
第三節 褒賞	三四
第四編 近代・現代	三七
第一章 行政	三九
第一節 私領の廃止	三九
第二節 岩川郷創設	三九
一 郷独立と整備	三九
二 伊勢家家中の移住	三四
第三節 常備隊	三四
第四節 諸制度施行	三四
一 末吉・岩川郷境界改定	三四
二 太政官布告	三四
三 土族	三四
四 苗字	三四
五 戸籍	三七
六 徴兵	三七

第五節	廃藩置県	三六	一	吏党民党抗争	三九
一	県の変遷	三六	二	国会議員	三七
二	郷村の行政	三九	三	県会議員	三七
三	大区小区制	三九	四	予選会	三七
四	郡区町村編成	三九	五	合併後の町議会議員	三七
五	戸長	三九	六	選挙管理委員会設置	三七
六	県会と町村会	三九	六	天皇御巡幸	三八
七	坂元村の移動	三九	第十一節	地方事務所の變遷	三九
第六節	東贈呷郡・南諸県郡	三九	第十二節	郡名の變更	三九
第七節	町村制実施	三九	第十三節	町村合併までの町村長	三九
一	町村の自治制	三九	第十四節	町村合併	三九
二	月野村の分村	三九	第十五節	大隅町の発足	三九
第八節	贈呷郡の発足	三九	一	合併前の各町村の状況	四〇
一	郡の区画	三九	二	大隅町	四〇
二	郡役所	三九	一	歴代町長	四〇
第九節	戦時体制	三九	二	歴代議長	四〇
一	大政翼賛会	三九	三	納税	四〇
二	翼賛壮年団	三九	四	庁舎及び諸制度	四〇
三	地方事務所の設置	三九	第十七節	町民憲章と町章	四三
四	戦時下の町村民	三九	第十八節	集落の変遷	四三
第十節	選挙	三九	一	行政と集落	四三

二	集落の自治	四六	二	学制公布以後	五〇
第二章	軍事	四〇	三	国民学校	五三
第一節	戊辰の役	四〇	四	学制改革	五三
第二節	台湾征伐・佐賀の乱	四四	五	教育組合からPTA	五五
第三節	西南の役	四七	第二節	教育行政	五五
一	征韓論者の下野	四七	第三節	青年教育	五七
二	西南の役	四八	第四節	岩川工業学校	五二
三	戦役と郷土	四八	第五節	各種学校	五八
四	官軍墓地	四九	第六節	学校統合	五〇
第四節	日清戦争	四九	第七節	学校の沿革	五三
第五節	日露戦争	四九	第八節	社会教育	五六
第六節	軍隊・在郷軍人会	四九	一	社会教育行政	五六
第七節	満州事変以後、太平洋戦争まで	四七	二	町村合併後の社会教育	五七
一	満州事変	四七	三	社会教育活動	五八
二	日中戦争から太平洋戦争へ	四八	四	社会教育団体	五九
三	岩川飛行場(八合原基地)	四九	五	文化の保存	五九
四	芙蓉の塔	四九	六	社会教育施設	五九
五	慰霊塔	四九	第九節	体育	五九
第三章	教育・文化	五二	第十節	芸術・文化	六一
第一節	学制の変遷	五二	第四章	産業・経済	六四
一	学制前の教育	五二	第一節	農政	六四

一	地租改正	五四	第五節	開田、開墾	六三
二	農会及び産業組合	五六	第六節	農業災害	六一
三	農業団体の統合と農業会	五三	第七節	養蚕	六四
四	食糧確保のための委員会	五三	第八節	果樹、園芸	六七
五	農地改革と農地委員会	五三	第九節	たばこ	六一
第二節	農業の変遷	五六	第十節	茶業	六六
一	明治・大正ころの農村	五六	第十一節	畜産	六九
二	農業の推移	六六	一	馬、牛	六九
三	農作物	六五	二	養豚	七三
第三節	農業関係機関団体	六〇	三	養鶏	七三
一	農業協同組合	六〇	四	畜産品評会	七四
二	農業改良普及所	六六	五	畜産基地	七六
三	農業共済組合	六七	六	畜産関係機関団体	七七
四	農業委員会	六六	第十二節	林業	七二
第四節	農業の施策	六〇	一	植林	七一
一	特殊土壌	六〇	二	町村合併後の林業	七三
二	村おこし運動	六四	三	特殊林産物	七五
三	新農山漁村対策事業	六七	四	森林組合	七六
四	南九州防災営農改善対策事業	六六	五	チップ工場	七八
五	農業構造改善事業	六九	第十三節	農業先覚者	七九
六	米の生産調整	六一	第十四節	商工業	七三

一	岩川の町	七三
二	恒吉の野町	七七
三	大隅町商工会	七六
四	商店街	七九
五	工場	七九
六	金融機関	七三
七	発電	七四
八	石油試掘	七六
第十五節	海外移住	七三
第五章	交通・運輸・通信	七四
第一節	道路・橋梁	七四
一	明治のころの交通	七四
二	各地の道路	七六
三	改良工事	七五
四	石橋	七五
第二節	鉄道・自動車	七五
一	国鉄志布志線開通	七五
二	自動車	七六
三	国鉄志布志線の廃止	七〇
第三節	都市計画	七三
第四節	有線放送	七三

第五節	郵便局・NTT	七五
第六章	警察・消防	七九
第一節	警察	七九
第二節	消防	七三
一	消防組	七三
二	大隅曾於地区消防組合	七五
第七章	福祉・保健衛生	七七
一	福祉	七七
二	保健衛生	七三
第三節	水道事業	八〇
第八章	神社・寺院	八〇
第一節	神社合祀	八〇
第二節	神社	八〇
第三節	廃仏毀釈	八六
第四節	寺院	八三
第九章	人物	八四
第十章	城跡	八四
第十一章	金石・物語・民俗・芸能	八三
一	金石	八三
二	五輪塔・宝塔類	八三
二	板碑	八五

三	六地藏	六六
四	田之神	六七
五	その他の金石	六七
第二節	物語	八五
第三節	民俗	八五
第四節	芸能	九三

大隅町誌年表	九九
--------	----

付録	九三
----	----

打起御條書并御郡方仰出留	九五
外城横目可致覚悟条々	九六
伊訪翁御飯屋仰渡留帳	九六
御領分御家来中江御条書之留	九七
御飯屋番并掛人数心得事留	九七
御飯屋番并掛人数被渡置候書付之留	九七
伊勢氏系図	九七
伊勢氏略系図	九七
戊辰役関川口戦記(抜すい)	九三
天保十四年彗星観測図(馬場文書)	九六

後記

序
説
大隅町の自然的環境

位 置

大隅町は曾於郡の中央に位置し、大隅半島の咽喉部を扼する位置にあり、鹿児島市、都城市、鹿屋市、志布志町を結ぶ交通の要衝にあたっている。東経百三十度五十二分より東経百三十一度三分、北緯三十一度四十分より北緯三十一度三十一分の間であり、北は福山町、末吉町に接し、東は松山町、南は有明町、大崎町、西は輝北町に接している。

面 積

面積は一四五・七六 km^2 で郡内でもっとも広く東西二十 km 、南北十四 km で、大字は岩川（旧五十町）、中之内、恒吉（旧長江）、坂元、大谷、須田木、月野、荒谷の八地区に区分されている。大隅町は岩川町、恒吉村、月野村が昭和三十年一月二十日、町村合併して形成され、さらに野方村の一部（荒谷地区）が同年四月一日編入合併して今日に至っている。

地 勢

地形は北西から東南へ長く、北西部の高地に端を発する前川、後川、月野川（上流は長江川ともいう）の三川が、それぞれ中部・東部・西部の波状形の凹地を随所に貫流し、東南に向かい合流、菱田川となって志布志湾にそそいでいる。

地質は肥沃とはいわれないが、この三川により全町を北部高台、中部高台、南部高台に大別し、畑地の大部分は台地に、山林原野は台地の斜面に多い。また川の流域に田地がある。山林は総面積の六十%弱の広さを占める。

気候は平均気温十六度くらいで比較的温暖である。内陸部ともいえるが海に遠くないため寒暖の差は極端でない。

降雨量は年差はあるが大体二千 mm 程度である。

地層

北に霧島、西に桜島、桜島の南に高限を望むことができが大隅町は火山の噴出物の堆積によって地層が形成されている。

町内の地層は場所によって差があるが、台地で浸蝕のない所では、編年上の基礎となる始良カルデラの堆積層、桜島発生期の堆積層、鬼界カルデラの堆積層は比較的是っきりしている。町の北西部は桜島や霧島に近い噴出物の層が他の地区より多いといえるものの露出している層だけでは町内全体の層を把握したとはいえず、今後本格的調査を要する。

北地区の本元寺付近の地層を图示するが、これは標準的なもので川路山の地層と似ている。この延長上に桜島があるのでその為とも思われる。

1層 暗灰色の表土で安永や大正の桜島噴火の火山灰層など、この層に含まれる。

2層 桜島の安永噴火の軽石といわれてきたが、近年文明噴火の噴出物に比定されている。

表土	1層
黄色浮石 (ボラ)	
腐蝕質黒土 (ニガ)	3層
黒ずんだ赤ホヤ	
赤ホヤ (煉瓦色)	5層
煉瓦色浮石 (ボラ)	
上部赤ホヤ 下部は腐蝕質黒土	6層
煉瓦色浮石 (ボラ) 上部腐蝕質黒土 下部灰褐色粘土	
シラス	6層

北地区標準地層

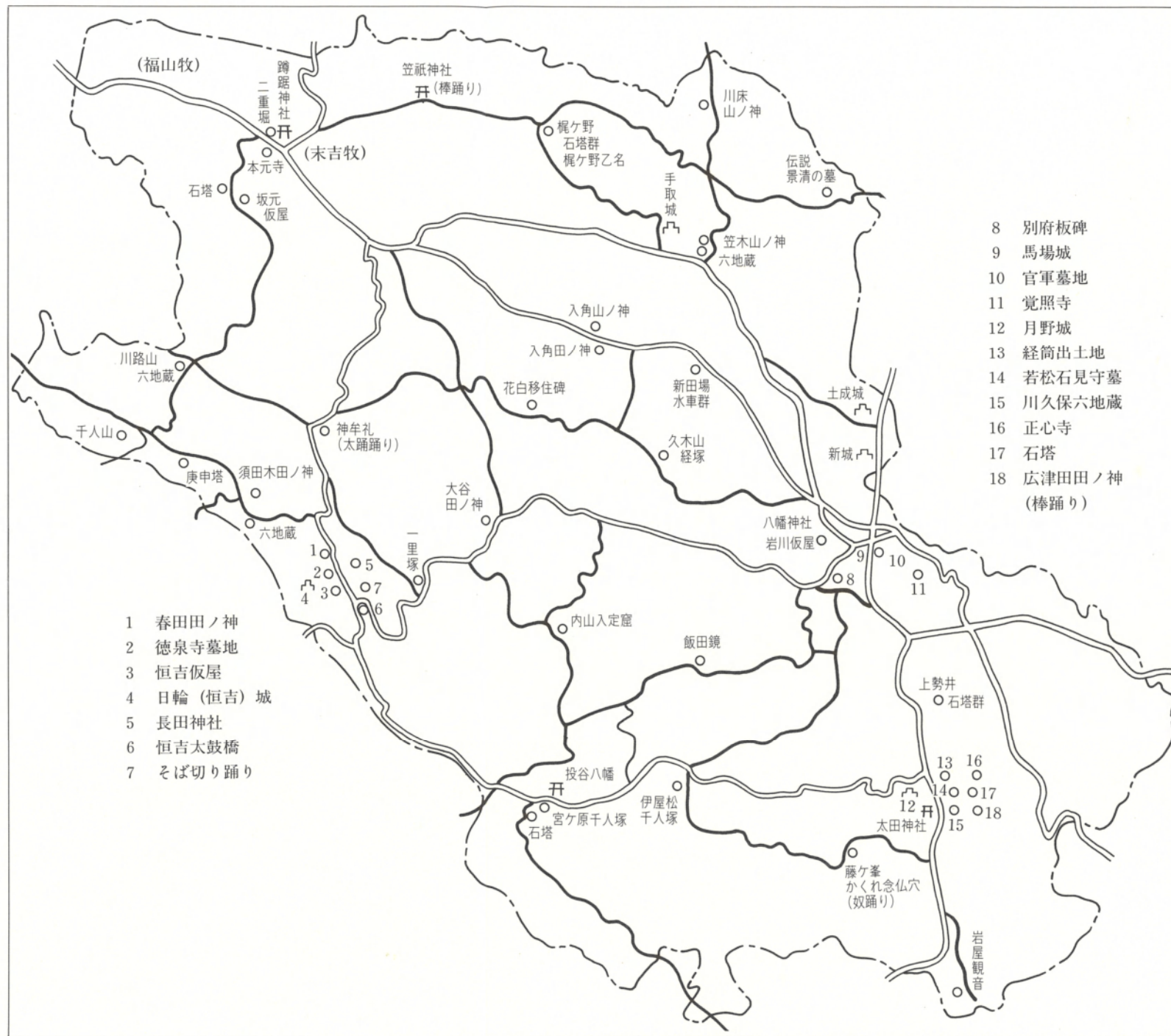
3層 黒ニガと呼んでいるが、腐蝕土と火山灰が混ざっている。土器や縄文晩期ごろはこの層にある。

4層 幾層にもなっているが大別すると図のようになる。赤ホヤ層に縄文土器、石器が多い。4層下部のボラ層 (煉瓦色浮石) も鬼界カルデラ (約六千年前) に比定される。このボラ層は全町に分布する。

5層 この層も幾層か重なる。中央煉瓦色浮石は桜島成長期 (約一万三千年以降) のものと考えられるが、川路山から北地区の一部で見られるものの、他の場所では団塊状の煉瓦色の粘土質の層となっている。

6層 シラスと呼ばれ二層に分かれているようである。始良カルデラ (約二万五千年ないし二万一千年前) 年代は諸説がある) の噴出物の堆積で非常に厚い層をなす。ここから二〇〇mくらいの所でのボーリング結果では地表からの深さ3mから三九mまでがシラス層で、その下層はローム質砂礫と砂層となり、深

さ九五mから一〇〇mが凝灰岩となっている。また、その下は砂礫層になっている。



- 1 春田田ノ神
- 2 徳泉寺墓地
- 3 恒吉仮屋
- 4 日輪 (恒吉) 城
- 5 長田神社
- 6 恒吉太鼓橋
- 7 そば切り踊り

- 8 別府板碑
- 9 馬場城
- 10 官軍墓地
- 11 覚照寺
- 12 月野城
- 13 経筒出土地
- 14 若松石見守墓
- 15 川久保六地藏
- 16 正心寺
- 17 石塔
- 18 広津田田ノ神 (棒踊り)

大隅町内古蹟地図